

令和7年度学校評価書

福井県立勝山高等学校

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
教育課程・学習支援	①カリキュラム・ポリシーに掲げた教育活動を実施し、客観的評価に基づいて、個人と組織でカリキュラムマネジメントを実施する。	カリキュラム・ポリシーに沿った授業実践に取り組んだ教員の割合は93.7%（昨年度97.1%）、また会議や研修に参加し授業計画再設計に取り組んだ教員も93.8%（昨年度91.2%）といずれも目標指数90%を上回った。昨年度と比較してほとんど変化がなく、取り組みには一定の成果が表れていた。新学習指導要領の内容に基づく観点別学習評価やカリキュラム・ポリシーに対する理解が深まってきたと考えられるが、さらにこれからも全教員が同じ方向に向かって、教育活動に取り組んでいけるように努めていく。	カリキュラム・ポリシーに沿った授業実践と、授業改善への取り組みは継続して行っていくが、生徒の探究的な学びを引き出しているか、グラデュエーション・ポリシーで示した生徒像にどれだけ生徒が近づいているかを検証していく必要がある。年度始めにカリキュラム・ポリシーやグラデュエーション・ポリシーを再確認して、各自がそれらを意識した教育活動を計画・実践していく。また、次期学習指導要領の内容も研究しつつ授業改善のための研究・研修の機会を充実させることで授業力向上を図っていく。
	②授業においてICTデバイスを活用し、探究的な学び(課題設定・情報収集・整理・分析・まとめ・表現)のために活用する。	ICTデバイスの活用について、本年度は「全授業時数の4分の1以上で活用した教員」が71.9%と昨年の61.8%から大幅に向上した(目標指数70.0%)。生徒も93.6%の生徒が情報の収集や整理、発表などに活用できていると回答しており、授業に探究的な活動を取り入れるなど授業改善の成果が現れてきたと考えられる。また保護者のICT活用に対する満足度は92.2%とおおむね肯定的な回答であるが、あまり満足していない保護者も7.8%いた。	学習用AIの導入など、ICTデバイス活用方法は日々進化しており、学習を効果的・効率的に進めるとともに探究的な学びに資する活用方法を常に研究していく必要がある。実際に使用しながらより効果的な活用方法を、生徒とともに考える機会を設け、今後さらに取り組みを進めていきたい。また、個別学習や家庭学習でもICTデバイス活用をするような工夫を取り入れ、生徒個人に合わせた活用方法を見つけられるよう支援していく。
生徒支援	①容儀を整え自発的に挨拶ができるように、全教職員の共通理解をはかり、継続的な指導に取り組む。	容儀、挨拶指導に取り組んだ教職員は91.4%、容儀を整え挨拶を行った生徒は100%、また保護者の満足度は93.7%（いずれも目標指数95%以上）であり、教職員のみの昨年度の97.0%を下回る結果となった。一方で生徒の自己評価は過去最高を記録した。生徒が挨拶や容儀で教職員からの指導を受ける機会が減ったためと考えられる。生徒と保護者の評価の差が広がったことが課題である。	挨拶指導は継続的に行うことで習慣化し、良好な人間関係を築くことにつながる。今後、さらに自ら進んで、学校、家庭、地域でも元気な挨拶ができるよう生徒や生活委員を中心に集会等で呼びかける。また、生徒支援部教員が毎朝生徒と交関で、容儀の確認と挨拶を行う。更に、生徒、教職員ともに共通理解をはかり、生徒の規範意識を高めるとともに、教職員の積極的な声掛けを増やしていく。
	②生徒の人権意識や規範意識が高まるように普段から声かけを行う。	生徒の不適切な言動に接したとき指導を行っている教職員は97.2%（目標指数95%以上）、友人が悩んでいるときに声掛けを行っている生徒は95.5%（目標指数95%以上）、いじめの未然防止や早期解決に向けた学校の取り組みに満足している保護者は91.7%（目標指数90%以上）で、すべての対象で目標指数を上回った。いじめアンケート等の取り組みを継続して定期的に行っていくためと考えられる。	多様な個性を尊重しあう社会の確立を目指す取り組みが重要である。学校では、自他の生命や人権を尊重し、良好な人間関係を築き、思いやりや助け合いの心を持って行動する態度を育てる必要がある。講演会、月頭集会、学年集会、LTなどを通して、社会の一員として社会に貢献できる人材の育成を目指す。
	③学校行事、ルールメイキングなど、生徒の自主的な活動を促す。	学校行事等で生徒の自主的な活動を支援した教職員は97.1%、主体的に学校運営を担った生徒は99.6%、生徒の主体的な活動の支援に対する保護者の満足度は100%（いずれも目標指数95%以上）で、すべての対象でほぼ目標指数を達成した。これは、学校祭や球技大会等学校行事を中心に活動場所や生徒数などを考慮した企画が成功したためであると考えられる。	新第1体育館や生徒数減に対応するために学校祭や球技大会などを生徒会や委員会が中心となり、生徒が主体的に、新しい運営方法や競技を考え実施することができた。今後も、学校祭、球技大会、遠足、ルールメイキング、中高連携などで、さらに自主的に活動できるように支援していく。
進路支援	①自らの進路について考える機会を充実と進路情報の効果的な活用を図り、主体的かつ適切な進路選択を支援する。	担任が調査対象となる「面談等による生徒との意識疎通」は目標指数を下回る結果が出ているが、担任以外の教員が誤って回答したデータが含まれているため、4年連続で目標値100%を達成できたことは間違いなく、「生徒への積極的な進路情報提供」に取り組んだ教職員の割合は昨年度より0.23ポイント上昇したが、目標の100%にはあと一步の状態である。「面談やガイダンスを通して得た情報により、進路目標を明確に」持った生徒は、3年生では96.6%と昨年度の98.9%をわずかに下回ったが、目標指数の95%は達成できた。1年生の85.2%、2年生86.6%という結果も昨年度を上回っており、学年進行とともに上昇させるという目標も達成できている。保護者の「進路に関する情報の提供」に対する満足度は昨年度を4.7ポイント上回る89.9%で、目標の90%に限りなく近づいた。	生徒が1・2年次からしっかりと進路目標を持つために、各種模擬試験だけでなく、進路希望調査、進路ガイダンス、小論文・志望理由書指導、企業人によるキャリア教育、大学教授・専門学校講師による模擬講義、就職・公務員ガイダンス、さらには外部機関主催の講座や講演会への参加促進など、各種進路支援を実施している。今後も、時代の変化と各学年の実態に応じた支援方法となるよう内容を見直し、学年会と連携して、生徒たちにとって必要かつ効果的なものを提供する。保護者への進路情報提供については、保護者の要望を基に学校で提供するべき情報が何かを明確にした上で、保護者と直接接する機会だけでなく、生徒を通じて、あるいは情報機器を活用して間接的に情報提供する機会を拡充する。
	②模擬試験等を有効活用し、進路意識向上・学力向上に努める。	「模試の事前・事後指導」を行った教科担当者は89.3%で、昨年度の92.3%から下降し、目標の95%とは隔たりがある。模試の「振り返り」に取り組んだ生徒は70.2%で、前年度より3ポイント以上低下し、目標の75%に到達しなかった。保護者の「模試結果を見ての子供との話し合い」への満足度は昨年度より高くなり、3.3ポイント増の81.0%と、目標の80%を上回った。	生徒が自ら時間を遣り繰りし、模試の過去問演習や弱点補強のための復習に計画的に取り組むよう、次年度も継続して学年会・教科と連携し、意識の向上を図る。保護者と生徒は「個票成績綴り」を介して進路について話し合い、それが意識疎通の機会となっているので、今後もこの取り組みは継続していく。さらに、担任・教科担任が「個票成績綴り」を有効活用し、次の模試では弱点の克服と成績向上を目指す前向きな取り組みができるよう、生徒に継続的な動きかけを行う。
	③生徒の進路選択に関わる自主的な活動を生徒に促す。	オープンキャンパス、地域連携活動、大学との連携事業などに参加している生徒が学年を追うごとに向上することを目標とし、3年生では目標指数を90%以上とした。結果は、1年生79.5%、2年生88.1%、3年生96.6%で、全学年で昨年度より大きく伸びており、学年を追うごとに向上し3年生で90%という目標は十分に達成できた。特に1年生については、昨年度より19ポイント増と大幅な伸びを示しており、オープンキャンパス等各種イベント、大学や地域との連携事業への積極的な参加を早期から呼びかけたことが好結果につながった。	生徒各自が早期から自主的に進路選択につながる活動に取り組むことの必要性に気付くことができるよう、今後も支援を継続していく。学校で実施している進路行事だけでなく、大学や地域等が実施している様々な事業の情報をできる限り生徒に提供し、進路支援部や担任から自主的な参加を個々の生徒に働きかける取り組みを継続・強化することで、進路選択に対する生徒の行動力を引き出していく。
保健管理	①清掃活動に積極的に取り組み、学習環境の美化に取り組む。	生徒とともに清掃活動に取り組んだ教職員は100%を達成した。98.8%の生徒も真面目に清掃に取り組んでおり、昨年の96.8%を上回った。校内環境美化を心がけている生徒は95.5%であり、昨年の97.1%をやや下回った。これは、今年度からベットの分別を細かくしたことで、若干ルールを守れなかった生徒がいたということが要因として挙げられる。	教職員の判断基準を「生徒とともに清掃活動に取り組む」としたことで、教職員・生徒ともに清掃活動に対し積極性が増し、相乗効果が得られている。この項目については、次年度も継続していく。本校の環境美化づくりの項目では、保護者の満足度が87.9%となり、昨年度の92.9%を下回った。外部からの評価を真摯に受け止める。次年度に向けて、特に清掃活動の方法について注目し、改善指導していく。
	②自身の健康管理や安全面に気を付けながら学校生活を送るよう努める。	生徒が自身の健康管理や安全面への意識を高めることを目的に、今年度、新規に項目を掲げた。これらのことへの心がけた生徒は96.0%と、目標指数80%を大きく上回った。	今回の回答により、おおむね日々自身の健康面に気を付けている生徒が多いことが分かった。しかし、インフルエンザや新型コロナウイルスなどの感染症が生徒間で流行している時期もあった。保健部では、注意喚起をしたり、マスクの着用を推奨したり、マスクを提供したりするなどの対策を行った。また、保健委員の生徒を中心に教室の換気を行うなど、できる限りの対策をとった。感染症予防については、次年度も指導を継続していく。また、日々睡眠不足の生徒も見受けられるため、生徒自身で生活習慣を見直すことができるよう支援する。
	③不適応やいじめの早期発見・対応と特別支援が必要な生徒への支援の充実を努める。	不適応やいじめへの対応と特別支援が必要な生徒の支援に取り組んだ教職員は昨年度と同じ97.1%と高い水準を保つことができた。「困りごとや悩みを学校の先生に相談することができる」と回答した生徒は89.1%となり、昨年度88.9%とほぼ同等であったが、目標指数の90%には届かなかった。また、保護者の満足度は87.9%となり、昨年度の83.2%をやや上回ったが、これも目標指数の90%には届かなかった。	生徒が保健室や相談室に気軽に足を運べる環境を整えたり、生徒がSOSを出している困りごとや悩みだけでなく、生徒の何気ない変化についても教職員間で情報共有・連携していけるよう、より一層、支援体制を強化する。また、スクールカウンセラーとの連携も引き続き行い、生徒を支援したり、保護者と話し合ったりするなどの活動を継続していく。
主体性の育成	①総合的な探究の時間、各教科、各行事等の内容が、生徒の主体的学びにつながるよう興味・実践と省察を行う。	探究学習の基盤となる生徒の主体性について、教職員の継続的支援の度合いを集計した。生徒の主体的学びにつながるよう、授業や行事等の内容を以前のものから更新している教職員が96.7%と目標指数80%を上回る結果となった。多くの教職員が生徒の様子をふまえ、より良い形で授業や行事を実施していることと努めていることがわかる。総合的な探究の時間においても、各学年で積極的に学校外の諸団体等と連携する活動が企画され、担任・副担任を始めとする教職員が様々な形で携わっていた。今後も教職員の取り組みがより有効なものとなるよう、生徒の変化に柔軟に対応した探究的な学びの推進を図る必要がある。	探究企画部としては、特に探究学習の面から、生徒の主体的学びを育もうとする教職員の取り組みの支援を継続していく。そのために、これまで企画・運営してきた研修会、情報発信、イベント等のあり方を見直し、生徒の実態に即したより効果的な内容への改善に努め、身に付けさせたい力(自己分析力、論理力、情報収集力、発信力等)を伸ばすための取り組みを支援する。
	②授業や行事の中で、自ら関心を持ち主体的に取り組めることを目指し、実践と振り返りを行う。	探究学習を通して最も伸ばして欲しい力のひとつである主体性について、自己評価を集計した。その結果、授業や行事に対して、以前の自分より主体的であろうと取り組んだ生徒は97.6%となり、目標指数80%を上回った。多くの生徒が日頃からより主体的に学習や行事に取り組もうと努めていることがわかる。今後も探究企画部として、生徒が探究学習で培われた様々な力を生かし、物事を達成する喜びとより強い意欲が持てるよう支援していく必要がある。	総合的な探究の時間だけでなく、普段の授業や学級活動においても生徒が安心して自分の意見を述べ、それが受け入れられる環境作りを努める。生徒同士の話し合いが意義あるものとなるよう生徒のファシリテーション能力や質問の技術を高める。更に学校外の方々と交流する機会を増やし、自身の探究成果を発表する場面を複数回設ける。